

富山県立高岡高等学校いじめ防止基本方針

富山県立高岡高等学校

はじめに

本校は、教育基本法にのっとり全人的教養と社会性の啓培に努めるとともに、「質実剛健」「自主自律」の精神を育成することを目指し、学校教育目標・教育方針を定め、有為な人材を育成するための指導をすすめている。しかし一方では、心の問題を抱える生徒や対人関係に悩む生徒も増えており、生徒理解及び生徒指導のあり方について職員全体の共通理解を深める必要が生じている。

本校では「生徒指導部や教育相談部だけにまかせきりにするのではなく、全員で指導する」との共通認識のもとで組織づくりを進めている。全ての生徒が健康で明るい学校生活を送ることができるよう、日常の指導体制を整備し、いじめの未然防止、早期発見に取り組むとともに、いじめを確認した場合は、適切かつ迅速に対処するため「学校いじめ防止基本方針」を定める。

I いじめに対する基本的な考え

いじめは、いじめを受けた生徒の教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長に重大な影響を与えるのみならず、その生命又は身体に危険を生じさせるおそれがある。いじめ防止等のための対策は、いじめを受けた生徒の生命および心身を保護することが特に重要であることを認識しつつ、学校、地域、家庭、その他の関係者の連携の下、いじめの問題を克服することを目指して行われなければならない。

【いじめの定義】

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

いじめ防止対策推進法 第2条より

【いじめ問題に関する基本的認識】

「いじめは絶対に許されない」
「いじめは卑劣な行為である」
「いじめは、どの子供にも、どの学校でも、起こりうる」

いじめ防止等のための基本的な方針(平成25年10月11日 文部科学大臣決定)より

II 本校の現状と課題

1 現状

- ・ 全校生徒の約半数は高岡市外の中学校からの入学者であり、広い地域からの生徒で構成されている。
- ・ 本校生徒はほぼ全員が大学進学を志望しており、保護者の子供に寄せる期待も極めて大きい。
- ・ 多くの生徒が学習と部活動の両立を目指している。
- ・ 学習活動などでの挫折体験が少ない生徒が多い。
- ・ 多くの生徒がスマートフォンを所有しており、また、そのほとんどがソーシャルネットワーキングサービスを利用している。

2 課題

- ・ 出身中学校の違いなどの理由から入学当初より集団に溶け込めず、孤立がちになる生徒が見られる。
- ・ 進学についての意識は高いが、その目的や社会に出てからの自己のあり方について悩む生徒もいる。
- ・ 学習につまずいた生徒で、学校生活への不適応傾向が生じる場合がある。
- ・ 様々な精神的重圧により心身のバランスを崩す生徒や心の問題を抱える生徒、対人関係に悩む生徒が増えている。
- ・ 学習のための時間的制約などから、部活動に積極的に参加しない生徒も見られる。

このような現状と課題を踏まえつつ、全ての生徒が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、いじめの問題に対応するための組織を設置するとともに、いじめの未然防止等のための対策を行う。

III いじめへの対応

1 いじめの問題に取り組むための組織

いじめの防止等に関する措置を実効的に行うために「いじめ防止等対策委員会」を設置する。

○ 構成員

- ・ 校長、副校長、教頭、生徒指導主事、教務・特活・保健厚生・教育相談部長、各学年主任（スクールカウンセラー）

※ 具体的な事例に対応するためのケース会議については、その都度、教頭及び生徒指導主事が協議の上、弁護士等の外部専門家、さらに関係学級担任、部活動指導者など必要に応じてメンバーを招集する。

○ 役割

- ① いじめが起きにくい、いじめを許さない環境づくり
 - ② 本校いじめ防止基本方針に基づく取組の実施と進捗状況の確認、検証
 - ③ 校内研修会の企画、実施
 - ④ アンケート結果等の整理、分析
 - ⑤ 生徒や保護者、地域に対する情報発信と意識啓発、意見聴取
 - ⑥ いじめ及びいじめが疑われる事案への対応
 - ⑦ いじめやいじめが疑われる行為を発見した場合の通報先・相談窓口
 - ⑧ 事実関係の把握といじめであるか否かの判断
 - ⑨ 本校いじめ防止基本方針の点検、見直し
- ※ 重大な事案については、教育委員会に直ちに報告し、連携して対応する。

2 未然防止

いじめはどの生徒にも起こりうるという認識を踏まえて、いじめの未然防止に取り組む。また、「いじめは絶対に許されない」という認識を生徒が持つよう、道徳教育においても指導する。

○ 具体的な対応策

- ① 分かりやすい授業、生徒指導の機能を生かした授業（自己決定の場を与える、自己存在感を与える、共感的な人間関係を育てる）に努める。
- ② 規範意識を高め、温かい人間関係づくりに努める。
- ③ 個人面接や日頃からの言葉かけを通じて自己有用感を高める。
- ④ 学級経営では、ホームルーム活動などとおして日頃の緊張感を解きほぐし、また生徒が自己有用感を高め、学級での居場所づくりができるように努める。入学後、進級後の新しいクラスにおいて、エンカウンターを実施し、生徒間の交流を深め、クラス内の雰囲気をよくする。

- ⑤ いじめの大半は言葉によるものであるので、折に触れて人権意識の涵養に努め、いじめの法律上の扱いを生徒に対して教える取組みを推進し、振る舞いや言葉遣いの指導に努める。
- ⑥ 人間形成の場としての重要性を踏まえ、部活動の指導にあたる。
- ⑦ いじめ防止の啓発に向け、標語やポスターを掲示すること、いじめ問題について考え話し合うHR等、生徒が主体的に取り組む活動の推進に努める。
- ⑧ 教職員の言動が、生徒を傷つけたり、他の生徒によるいじめを助長したりすることがないよう、細心の注意を払う。
- ⑨ ネットいじめ防止のため、ソーシャルネットワーキングサービスの適切な利用方法を含む情報モラル教育をあらゆる教育活動を通じて行うとともに、専門家による講習会を計画的に取り入れる。
- ⑩ 入学時に保護者からプロフィールカードを提出してもらい、担任及び教育相談部、スクールカウンセラーが点検することで、心に問題を持つ生徒等を把握しておく。
- ⑪ 家庭環境が、あたたかく居心地の良い場所となるよう、保護者との共通理解をはかる。
- ⑫ 学校として特に配慮が必要な生徒については、日常的に当該生徒の特性を踏まえた適切な支援を行うとともに保護者との連携、周囲生徒に対する指導を行う。
※特に配慮が必要な生徒とは、発達障害を含む障害のある生徒、性同一性障害や性的志向・性自認に係る生徒

3 早期発見

特に全員に対する個人面接を重んじ、生徒一人一人の生活環境、生育歴および心理的状況をとらえた多様な指導をすすめる。

些細な兆候であっても、いじめではないかとの疑いを持ち、いじめを見逃したり軽視したりすることなく、重大事態につながるものという疑いを含めて、積極的な認知に努める。

○ 具体的な対応策

- ① 重大事態と捉えられた具体的事例について、職員間の共通理解をはかる。
- ② 朝のST時や課外活動中など、生徒の様子に目を配り、担任や部活動顧問、授業担当者など、気になる生徒に対しては声かけや面談を迅速かつ適切に行う。
- ③ 休み時間や放課後に、計画的な校内巡回を行う。特に、いじめ被害の心配がある生徒のクラスへは、(教科)担任が授業時間前、早めに行く等、十分配慮する。
- ④ 孤立ぎみの生徒や嫌な思いをしている生徒がいないか、ネット上で生徒間にトラブルが起きていないかなど、クラスの生徒に定期的に聞くことでクラス内の人間関係把握に努める。
- ⑤ 学級日誌、生徒との雑談や普段の授業等から情報を収集し、些細なことでも学年主任や生徒指導主事に伝え、教職員間で情報の共有に努める。また、迅速な報告・連絡・相談に努める。
- ⑥ アンケート調査(いじめ調査)や教育相談(個人面談)を定期的に行い、早期発見に努める。アンケート実施後は、いじめ等に関する情報や心配なことはすべて、当日中に学年主任を通して生徒指導主事・管理職に報告し、「いじめ等防止等対策委員会」にも報告する。アンケート結果、面談の記録についても共有をはかり、5年間保存する。また、調査に基づいた教育相談の充実をはかる。
- ⑦ 保護者や地域との連携を積極的にすすめ、「いじめ通報・相談窓口」を周知する。

4 早期対応

いじめやいじめの疑いを認知した場合には、直ちに担任、学年主任、生徒指導主事等で情報を共有するとともに、迅速にいじめを受けた生徒の安全確保を行う。さらに関係生徒に対する事情確認並びに適切な指導等、家庭や教育委員会、関係機関とともに連携した組織的な対応で早期解消に取り組む。

生徒が心のバランスを崩していると認知される場合等は、スクールカウンセラーの指導援助を参考に、校内外の関係諸機関と連絡を取り、早期かつ継続的な対策を講じる。

○ 具体的な対応策

- ① 被害生徒に対しては、本人の痛み寄り添い、心のケアに努め、いじめから守る。加害生徒に

対しては、当該生徒の人格の成長を旨として、教育的配慮の下、毅然とした対応を行うとともに、心にも寄り添う。

- ② 聞き取り調査による詳細な事実確認と正確な状況把握を、正確かつ迅速に行い、いじめの原因や背景を把握する。
- ③ 指導方針の明確化を図り、教職員の緊密な情報交換や共通理解及びチームによる対応を行う。
(指導経過を時系列でまとめて記録)
- ④ 教育委員会へ直ちに連絡する。(必要に応じ児童相談所、警察署等にも連絡する)
- ⑤ 被害生徒、加害生徒の保護者に対しては、家庭との齟齬が生じないよう、学校が把握した事実及び対応策等を、速やかに知らせる。
(全容把握に時間がかかる場合は、途中経過について適時報告)
- ⑥ ネットいじめについては、書き込みを確認・保存し、書き込んだ生徒に削除させることや、サイト管理者への削除要請を行うことでいじめの書き込み等の削除、拡散の防止に努める。生徒の生命、身体、財産等に被害が生じる恐れがあるときは、警察等と連携して対応する。

5 再発防止

同じ生徒を対象としたいじめの再発や類似のいじめの発生を防止する。なお、いじめの加害者と被害者が入れ替わる、いじめの対象が変わるなど、形態を変えていじめが継続することに注意する。

○ 具体的な対応策

- ① 校長をはじめ全ての教職員がそれぞれの教育活動において、いじめの問題に関する積極的な指導を行う。
- ② お互いを思いやり、尊重し、生命や人権を大切にする生徒を育成する指導等の充実に努める。
- ③ ホームルーム活動の時間にいじめに関わる問題を取り上げ、指導を行う。
- ④ 生徒会活動等において、いじめの問題を取り上げる。
- ⑤ いじめが解決したと思われる場合でも、安易に解消とせず、生徒の変化を定期的に確認・検証し、必要な支援、指導を継続して行う。
※いじめが「解消している」状態の判断
 - ・いじめに係る行為が相当の期間(少なくとも3か月が目安)止んでいること
 - ・被害生徒が心身の苦痛を感じていないこと
- ⑥ 生徒の変化を、定期的に確認・検証しながら継続して支援し、必要に応じて支援策を修正する。
- ⑦ 「学校いじめ防止基本方針」や「学校いじめ問題等対策委員会」が、いじめを受けた生徒を守り、事案の解決を図る体制であることを生徒に認識される取組を推進する。

6 地域や家庭との連携

生徒の健やかな成長を促すため、PTAや地域とともに、いじめの問題について協議する機会を設けるなど、地域、家庭と連携した取組を推進する。

○ 具体的な対応策

- ① 本校の「いじめ防止基本方針」を公表し、保護者や地域の理解と協力を得ることができるよう努める。
- ② 家庭訪問や学年・学級だより等を通じて、家庭との緊密な連携・協力を図る。
- ③ いじめが起きた場合には、家庭との連携を密にし、協力してその解消に当たる。
- ④ PTAや学校評議員会等、地域の関係団体とともに、いじめの問題について協議する機会(PTA総会、学年研修会、学校評議員会等)を設け、いじめの根絶に向けて地域ぐるみの対策を進める。
- ⑤ 生徒はもちろん、保護者に対してもスマートフォン等を使ったネットいじめの事例を紹介するなど、ネットの危険性について理解を深め、情報機器の使用やネットの利用におけるマナーやルール作りについての啓発活動を行う。

IV 年間計画

いじめ防止に向けた取組						
月	対策委員会	調査	面接(教育相談)	校内研修会	生徒会活動	その他
4月	○		○(全学年)			PTA総会 (保護者の啓発)
5月			○(全学年)			
6月			○(全学年)		○	
7月	○	○	○(全学年)	○ (調査報告等)		
8月			○(全学年)			
9月			○(全学年)			
10月			○(全学年)		○ (講話、ポスターによる啓発)	PTA研修会 (保護者の啓発)
11月			○(全学年)			現業
12月	○	○	○(全学年)	○ (調査報告等)		
1月			○(全学年)			
2月			○(全学年)			
3月	○	○	○(全学年)	○ (調査報告等)		講演会 (新入保護者)
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・定例4回 (校運後に開催) ・緊急時には随時対処 	<ul style="list-style-type: none"> ・年度内 3回実施 		<ul style="list-style-type: none"> ・年度内 3回実施 		教育相談たより 発行(年10回) 保護者対象講演 会(年3回)

V いじめが起こったときの組織的な対応

